

令和六年度別府市小・中学生「人権作文」入賞作品

別府市人権問題啓発推進協議会長賞

「介ごという仕事」

別府市立上人小学校六年 平松 優咲

私のお母さんは二十さいのころから介護福祉士の仕事をしています。今年の夏休みの自学も介護福祉士の仕事について調べました。

私は「人権」と聞くと、差別・いじめなどが思いかびます。しかし、調べたり、お母さんの話を聞いたりしていくうちに、まったく頭になかった「介ご」が一番人権という言葉に近いのではないかと思うようになりました。

介ごの仕事はおじいさん、おばあさんのお世話をしたり、障がいのある方の手助けをします。

私は、お母さんはそういう方のお手伝いをしているのだと思っていました。お母さんは、

「お手伝いではないんだよ。」

と教えてくれました。

まだ、私にはむずかしくちがいがよくわかりませんが、お母さんは、

「その方々と一緒に生活するお仕事なんだよ。」と言っています。

そして、

「人と一緒に生活するということは、人の命をお互いにもらっていることになると思う。」

おじいちゃん、おばあちゃん、障がいがある人、大人、子ども、男、女は関係なく、人は

絶対に一人では生きていけないからね。」

と言っていました。

私にはお兄ちゃんと弟がいますが、いつもケンカをします。いやな言い方をされたり、言うことを聞かなかったりするので、とても腹が立ちます。しかし、学校が休みの時や、夜にもお母さんがお仕事へ行く時、さびしい思いをするのも、テレビを見て笑うのも、こっそり夜遅くまで起きているのも一緒です。おたがいに命をもらっているというのはそういうことなのかなと思いました。

そして、一緒に生活しているのは家族だけではなく、親友、小学校のクラスメイト、先生もみんなと一緒に生活しているとも教えてもらいました。みんなと命を分け合っていると思うと、少し相手のことを考えて行動できる気がします。

自学のために調べていると、お母さんの仕事はとても大変なお仕事です。でも、お母さんはいつも楽しそうです。家でも、お仕事でも誰かと一緒に生活してるからなのかなと思います。

お母さんは今、おじいちゃんとおばあちゃんがいるしせつではなく、介護福祉士さんになるために勉強をしている人の先生をしています。お母さんは今も変わらず、お母さんは介ごの仕事が大好きで、好きなことを仕事に出きるのは幸せだと言って、楽しそうにお仕事をします。

いやな思いや辛い思いをしても、また楽しいことうれしいことも分け合えるような、命が関わる介ごのお仕事は「人権」にとっても大きく関わることだと感じました。

そんな人がたくさん増えると、いろいろな人権の問題も少しずつでもやわらいでいくと思います。